

県道高野・守山線特殊改良工事に伴う

# 高野遺跡発掘調査報告書

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

県道高野・守山線特殊改良工事に伴う

# 高野遺跡発掘調査報告書

滋賀県教育委員会

財団  
法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。こうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々にいたる貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに県道高野守山線特殊改良工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました、地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光雄

## 例　　言

1. 本書は、県道高野一守山線道路改良工事に伴う高野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県土木部道路課からの委託（再配当）により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、（財）滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財調査課二係木戸雅寿がこれを担当した。又、現地においては栗東町教育委員会の協力を得た記してここに感謝の意を表わしたい。
4. 本書の執筆・編集は、調査担当者木戸雅寿がこれにあたり辻峰子がそれを補佐した。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原 浩
課長補佐	中正 輝彦
埋蔵文化財係長	林 博通
技師	川田 政晴
管理係	山本 徳樹

(財) 滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査二係長	出中 勝弘
技師	木戸 雅寿
総務課長	山下 弘
主事	松本 幡弘

## 目 次

序 文

例 言

I. 位置と環境 ..... 1

II. 調査の経過 ..... 2

III. 調査の結果 ..... 4

  1. 遺 構 ..... 4

  2. 遺 物 ..... 13

IV. 年 代 ..... 19

V. 結 語 ..... 20

## 図版目次

- 図版1. 遺物実測図1  
図版2. 遺物実測図2  
図版3. 遺物実測図3  
図版4. 遺物実測図4  
図版5. 遺物実測図5  
図版6. 遺物実測図6  
図版7. 調査区平面図1  
図版8. 調査区平面図2  
図版9. 調査区平面図3  
図版10. (上) 南トレンチ全景 (北より)  
          (下) 南トレンチ全景 (南より)  
図版11. 北トレンチ全景  
図版12. (上) SB-1 (西より)  
          (下) SB-2 (南より)  
図版13. (上) SH-1, SH-2 (南東より)  
          (下) SH-1, SH-2 (南より)  
図版14. (上) SH-1, 管工出土状況  
          (下) SH-1, P-7, 砥石出土状況  
図版15. (上) SH-2、土器出土状況  
          (下) SK-12、土器群出土状況  
図版16. (上) SH-7 (南西より)  
          (下) SH-6 (南東より)  
図版17. (上) SH-7, P-3、土器出土状況 (南西より)  
          (下) SH-7, P-3、土器出土状況 (北より)  
図版18. 出土遺物  
図版19. 出土遺物  
図版20. 出土遺物

図版21. 出土遺物

図版22. 出土遺物

図版23. 出土遺物

図版24. 出土遺物

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	2
第2図 トレンチ設定図.....	3
第3図 遺物実測図.....	5
第4図 SK-12遺物出土状況図.....	7
第5図 SH-1平面・断面図.....	8
第6図 SH-1出土、石・鉄製品実測図.....	9
第7図 SH-2平面・断面図.....	10
第8図 SH-7、(P-3) 遺物出土状況図.....	11
第9図 SH-6、SH-7平面・断面図.....	12
第10図 土器編年試案.....	18-19
第11図 遺構変遷図.....	21

## I. 位置と環境

今回の調査対象地は、栗東町の北部、小坂村近くに位置する遺跡である。当調査区周辺は、すぐ脇を国道8号線と1号線を結ぶ県道栗東一片岡線が、東西に走り交通の要衝となっているところである。また、地形的には野洲川とその支流の沖積作用による扇状地状の平野が広がっており、そのなかに野洲川山河の自然堤防状の微高地が存在するところである。<sup>①</sup>周辺の遺跡をみてみると、旧石器や縄文時代の道路については明瞭ではないが、弥生時代の遺跡としてはまだ正確には報告されてはいないが前期の中沢遺跡や中期の土塙墓群がかくにんされている靈仙寺遺跡等がある。古墳時代に関しては多くの遺跡が町内一帯に存在しているが、これらはいずれも刺掻していた小櫻山公・治田連・出庭臣・高野造・芦井造・竹田連・勾君などの古代豪族の開拓地であるとおもわれるところであり周辺には前期古墳である三角縁三神三帆形製鏡を出土した亀塚古墳や三角縁三神三帆形鏡・盤龍鏡の出土をみた岡山古墳があり、中期の古墳としては、全長80mの帆立貝式古墳である椿山古墳や安養寺山麓に造られた安養寺古墳群がある。なかでも、新開1号墳では革縫衝角付甲・銅留肩庇付甲や鏡、玉類等が出土しており特に有名である。後期の古墳においては、南部には善勝寺山古墳や龍王古墳が、中部丘陵には小櫻山古墳群や日向山古墳群が、北部平野では、小櫻古墳群がある。<sup>②</sup>白鳳～奈良時代の遺跡においてはその集落跡は明確にはなっていないが町内には多くの寺院跡や窯跡の存在が知られている。<sup>③</sup>平安時代～中世にかけては手原遺跡がすでに報告されている。

### 註

①栗東町市史編纂委員会「栗東町史」（栗東町役場 1981）

②藤岡謙二郎「草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告」（滋賀県教育委員会）

③大橋信弥「手原遺跡発掘調査報告書」（栗東町教育委員会・栗東町埋蔵文化財調査団 1981）

④上に同じ

## II. 調査の経過

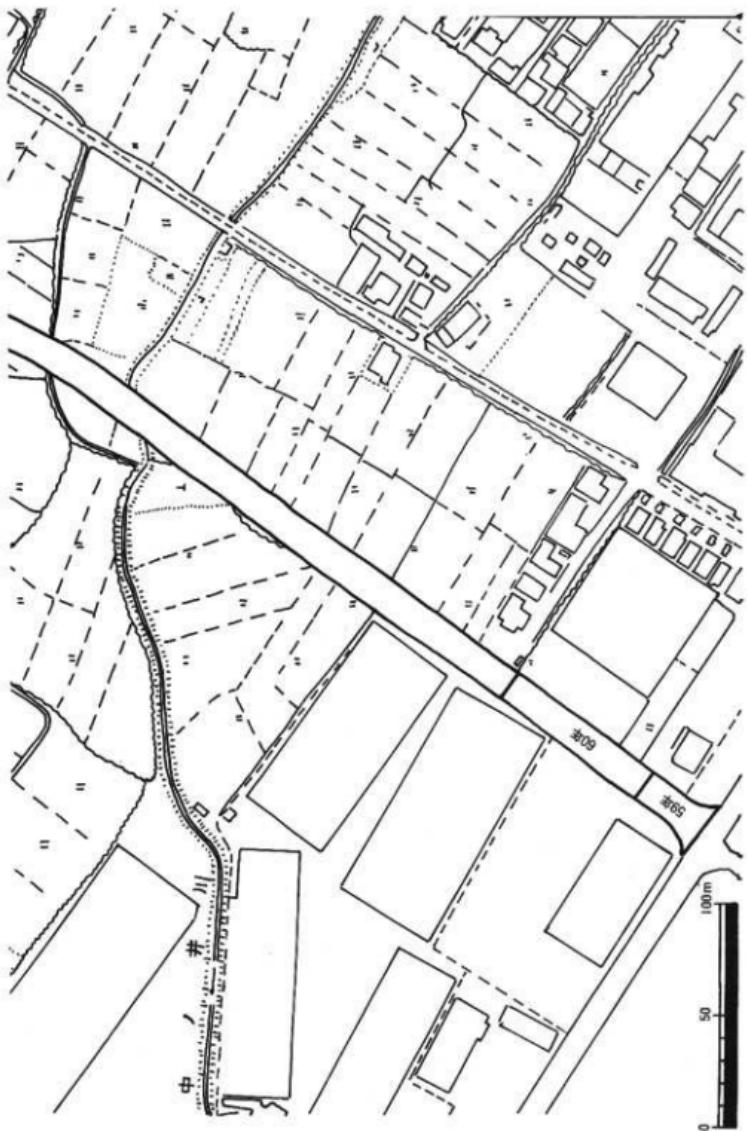
かねてより計画されていた高野一守山線は、昭和59年度末に工事に先立って起点より20mの調査が実施された。昭和60年度はこれに引き続き4月より協議にはいり、同26日より現地調査を開始した。調査は、起点より30m～110mを幅14mで調査区の設定をして実施した。調査は、周辺に排土を盛ることが許されていないために排土処理を考慮して調査区を南北方向に二分し、まず、南側から開始し排土を移し変え北側を調査した。遺構検出は表土層をバックフォーにより除去、その後は人力により完掘し図面と写真により記録保存をはかった。調査は、終始苦さと水田から流れこむ水や雨水、排土処理に悩まされた。



第1図 遺跡位置図

- |            |           |            |
|------------|-----------|------------|
| 1. 根迦寺遺跡   | 2. 多福寺遺跡  | 3. 林遺跡     |
| 4. 車塚遺跡    | 5. 大塚遺跡   | 6. イク塚遺跡   |
| 7. 六地蔵遺跡   | 8. 多喜山遺跡  | 9. 日向山遺跡   |
| 10. 唯心教寺遺跡 | 11. 相坂寺遺跡 | 12. 辻遺跡    |
| 13. 平原遺跡   | 14. 小野遺跡  | 15. 多喜山城遺跡 |
| 16. 六地蔵遺跡  | 17. 高野館遺跡 | 18. 高野遺跡   |

第2図 レンチ設定図



### III. 調査の結果

#### 1. 遺構

本調査において検出した遺構には、溝跡（S D）・掘立柱建物跡（S B）・ピット状遺構（S P）・土壙（S K）・竪穴式住居跡（S H）がある。これらの遺構は調査区全域にわたってまんべんなく分布しているが、竪穴式住居跡においては調査区のほぼ北半部に集中してみられた。以下に、その各々にふれて報告していく。

##### 溝（S D）

S D-1： S K-6により切られた溝状遺構である。長さは1.5m以上、幅は20cm、深さは、約10cmを計る浅いものである。

S D-2： 調査区を東西に横断するものである。ピット群が多数上に切っている為、これらよりも古い時代のものとおもわれるが、遺物からは時期を断定するにはいたらない。幅は、東で2.9m、西で58cmで、深さは、約20cmを計る。覆土は3層に大別でき上層は淡灰黄色粘質土（マンガンを含む）で、中層は北側肩口より明灰黄色粘質土（マンガンを含む）が入りこみ、下層は灰黄色粘質土（マンガンを含む）にブロック状に褐灰黄色粘質土がまじった状況になっていた。

S D-3： 調査区の西側に東西方向に延びる溝状遺構で、長さは1.1m以上あり、幅は28cm、深さは約10cmを計る浅いものである。

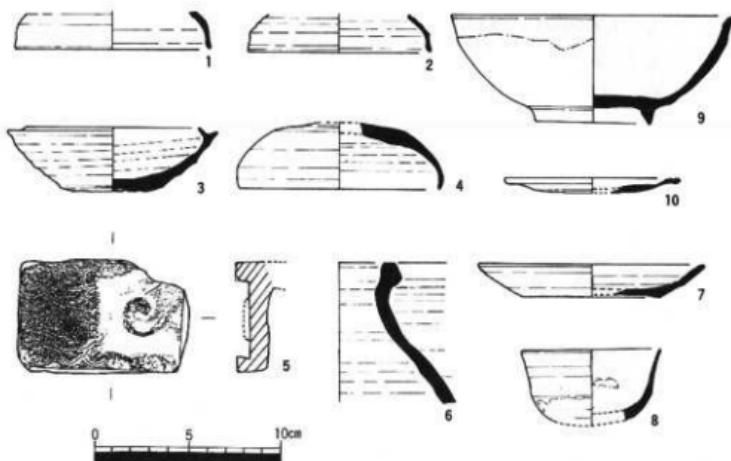
S D-4： 調査区のほぼ中央を南北に流れるものでS H-1・S K-10、13を切っている。長さは14m以上あり、幅は70cm～154cm、深さは約5cm～10cmはかる。覆土は3層に大別でき西側より肩口から黄灰茶色粘質土、茶灰黄色粘質土、褐黃灰色粘質土（何れもマンガンを含む）の順に入り込んでいる。

S D-5、6： 調査区を東西に横切るかたちで、S H-1を切るもので共に幅40cm～70cmで深さ約15cmを計り、U字形をなす。時期は出土している遺物、S D-6の須恵器杯身（図3-1）TK-209、S D-5の須恵器杯蓋（図3-3）TK-217、より6C末～7C初頭といえる。

S D-7： 調査区を東西に斜めに横切るかたちで、S H-2溝の一部を切るもので、中央でS D-10と交差する形となり、東で二股に別れているが各々の前後関係は不明である幅は45cm、深さは約15cmを計る。覆土は灰色粘土の単一層である。時代は出土している遺物、須恵器杯蓋（図3-3）TK-217、7C初頭といえる。

SD-8、9：調査区の西端を南北に走るもので幅は90cm～100cmで深さは約60cmを計る。出土遺物は、SD-8では郭線が消滅しているが周縁は未だ広幅になっていない蕨手状文の軒平瓦（図3-5）の右端と無地志野かとおもわれる皿（図3-7）が出土している。時期は16c後半とおもわれる。SD-9では信楽焼壺の口縁部の破片（図3-6）と美濃焼かとおもわれる鉄軸の猪口（図3-8）が出土している。時期は16c後半～17cあたりかとおもわれる。

SD-10、11：調査区のほぼ中央を東西に走る溝でSD-10、11は調査区の西で合流し池状の溜りになっている。また、その池状の溜りには周辺にピット状の窪みがありその中心部は深い落ち込みになっている。溝の幅は広いところで1.6m有り、狭いところでは36cmを計る。溝の深さは約20cm有り、池状の部分では1.3m程ある。これらの溝の時期は溝の上に切っているピットの関係やSD-5で出土している須恵器杯身の同個体の破片が出土していることから考え合わせてSD-5、6と同じ時期の6c末～7c初頭のころのものであるとおもわれる。



第3図 遺物実測図

### 掘立掘建物 (S B)

S B-1： 1間（1.5m）×2間（2.1m）の建物で、柱穴掘り方は長径40cm程度の橢円形もしくは直径36cm～52cm位の円形状を呈する。小屋掛けのような建物が想定できる。

S B-2： 柵行5間（11m）×梁行1間以上（2.2m以上）の建物で、柱穴掘り方は直径32cm～44cm位の円形状を呈する。遺物としては、P-64から手の字土師器皿（図-10）が、P-116からは近江系黒色土師器皿（図3-9）が出上している。時代は、何れも11c末である。

### ピット群 (S P)

ピット状の遺構はS B-1やS B-2の柱穴を含めて、今回の調査区では総数117個の柱穴が検出できた。このうちで実際に建物を構成するのは上記の2棟であったが、何れのピットもこのような何れかの時期の建物を構成する柱穴のひとつとなるものとおもわれるが調査面積の限界と調査の限界から性格を明らかにすることはできない。

### 土壤 (S K)

S K-4： 長径92cmの橢円形を呈する土壤で、層位は3層に大別でき上層より順に灰黄色粘土、淡灰黄色粘土、明黄灰色粘土とレンズ状に堆積している。

S K-5： 南北方向に糸瓜状の形を呈する土壤で長径は5mを計り深さは10cm計る北端にはピット状の窪みが二つある。

S K-6： S K-5の東隣に東西方向にある土壤で形状は長方形を呈する。長辺は2.2m短辺は84cmを計る。深さは13cmを計る。

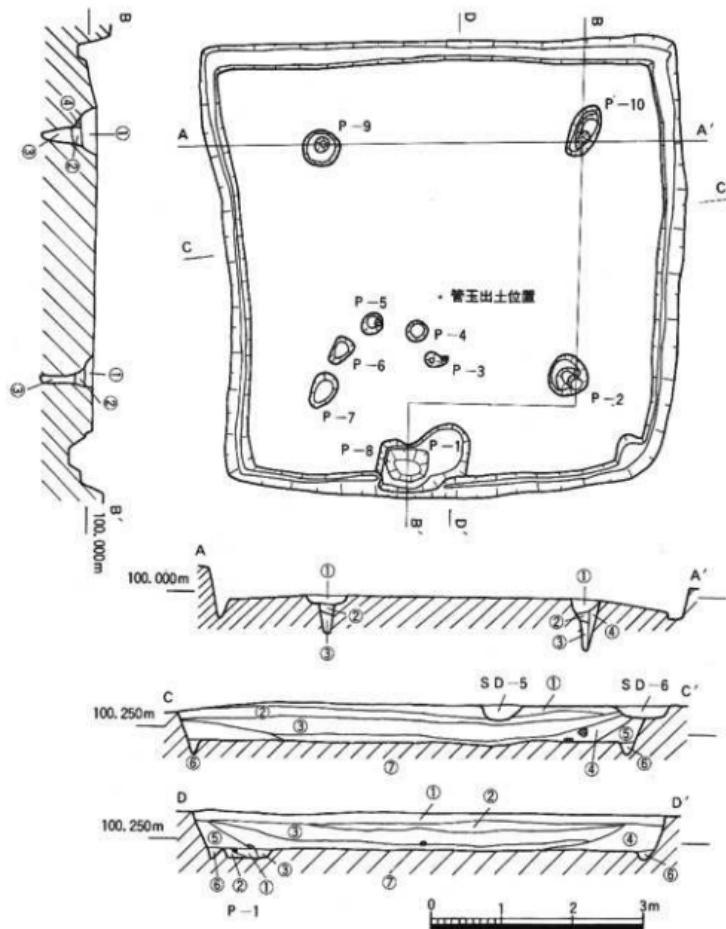
S K-7： 調査区の中央に南北方向にある土壤で形状は細長い不整形を呈する。覆土は黄灰褐色粘土（マンガンを含む）である。

S K-8： S K-10を切るかたちで存在する、二等辺三角形を呈する土壤である。覆土は灰黄色粘土である。

S K-9： S K-10とS D-4の間に細長い胡瓜状を呈する土壤で、長さは3.5m計る覆土は黄灰褐色粘土である。

S K-10： S K-8とS D-4によって切られているL字状の土壤である。覆土は黄褐色粘土（マンガンを含む）

S K-11： S D-7の南に存在するピット群を縫うように調査区の中央に南北方向に存在する不整形の土壤である。長さは4.8mであるが、深さは6cmと浅いものである。覆土は淡灰褐色土（マンガンを多量に含む）である。



- |                      |                    |                    |
|----------------------|--------------------|--------------------|
| ① 明黄褐色粘土(マンガンを大量に含む) | P-1                | P-9                |
| ② 黄褐色粘土(マンガンを大量に含む)  | ① 灰黄色粘砂土           | ① 黑灰色粘土            |
| ③ 茶褐色粘土              | ② 茶黃色粘土            | ② 暗灰褐色粘土(マンガン・炭含む) |
| ④ 黑灰色粘土(炭・礫を大量に含む)   | P-2                | ③ 灰色粘土             |
| ⑤ 暗茶色粘砂土             | ① 黑灰色粘土            | P-10               |
| ⑥ 暗黄褐色粘砂土(炭・焼土を含む)   | ② 黑灰褐色粘土(マンガン・炭含む) | ① 黑灰色粘土            |
| ⑦ 暗灰色粘土              | ③ 灰色粘土(炭含む)        | ② 黑灰褐色粘土           |

第5図 SH-1平面・断面図

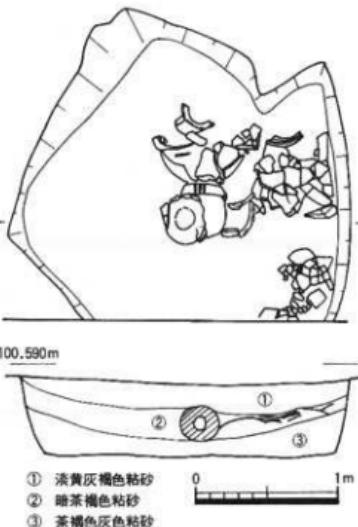
S K-12： 調査区の北西隅に長方形もししくは楕円形を呈すると思われる土壌の一部である。層位は3層に大別でき上層は淡黄灰褐色粘砂、中層は暗茶褐色粘砂、下層は茶褐色粘砂でレンズ状に堆積している。このうち中層より多量の土器が出土している。

S K-13： 調査区の東隅にある直径80cmの円形の土壌で真中で直径46cmの段が付く段掘り状になっている。深さは40cmを計る。覆土は灰色粘砂の単一層である。

S K-14, 15： S H-7, S D-11との間に位置し両者とも長方形の一隅が突出するプランを持つもので短辺1.6m～2m、長辺4m～5.2mを計る。深さは、約14cm～19cmである。

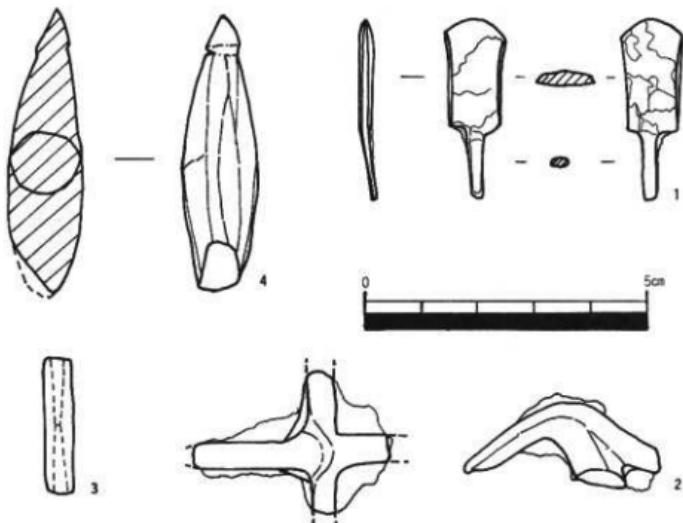
#### 竪穴式住居跡（S H）

S H-1： 調査区のほぼ中央に位置するもので古墳時代末のS D-5や6、S D-4によってその上が切られている。形態は、一辺10.6mのはば正方形プランを呈し、建物の方向はほぼ磁北を向く。竪穴の壁をなす肩は床面まで80cmと深く四方ともほぼ直立する形で崩壊する事無く原状をよくたもっている。壁溝は南辺中央部に存在する貯藏穴と思われるP-1を中心にして、巡る形で幅20cm、深さ10cmのものが存在している。柱穴は四本柱（P-2, P-7, P-9, P-10）で、柱間はほぼ3.4mである。床面は中央がやや高く縁辺部にむかって傾斜している。付属施設として、P-7の脇にピット状の遺構が取り巻くように存在しているが、これらは主柱を支える添え柱の跡かと考えられる。覆土は基本的に五層に分類できます上より一層明黄褐色粘土（マンガンを多量に含む）が20cmぐらいに均等に堆積し、その直下に二層黄褐色粘土（マンガンを多量に含む）が、さらに三層茶褐色粘土がレンズ状に堆積をして四層黒灰色粘土（炭・礫を多量に含む）五層暗茶灰色粘砂上が肩口より落ち込んでいる。ベースは、



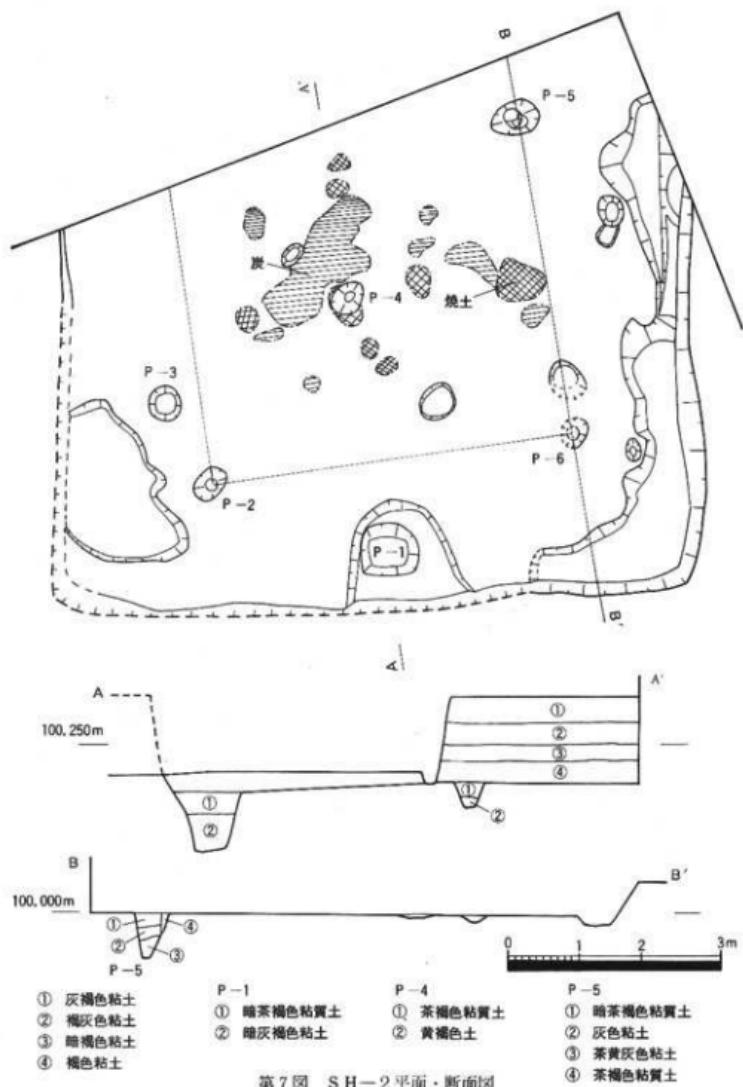
第4図 SK-12遺物出土状況図

暗灰色粘土である。出土遺物には多量の土器や砥石等の石製品を始めガラス玉1点、管玉1点、用途不明石製品、鐵鏃1点、形状不明製品等が出土している。



第6図 SH-1出土、石・鉄製品実測図

S H - 2 : S H - 1 のほぼ真北に位置する平面プランが一辺 9 m の方形の竪穴住居跡であるが、建物の南西隅を S H - 1 が切っており、北西隅は調査区外にあたり検出されていない。従って竪穴の壁は、完全には東の壁しか存在していないが、その床面から肩までの深さは 60cm を計る。壁溝は明確には確認されていないが、東側で一段落ち込んだ不整形の落ち込みが確認されている。また、S H - 1 同様南辺の中央には隅丸方形の段掘状の貯蔵穴とおもわれる土壙がある。柱は北西隅が未確認ではあるが中央に芯柱を持つ (P-4) 四本柱 (P-2, P-5, P-6) のものである。柱間は東西 5.5m 、南北 4.6m を計る。また、とくにその四本柱の内側芯柱を中心にして 16ヶ所の焼上・炭の痕跡が確認されており火焚の状況が良く解る。覆土はその全貌を知る事はできないが基本的には四層 (一層灰褐色粘土、二層褐灰色粘土、三層暗褐色粘土、四層褐色粘土) からなっており、ほぼ均等に平行堆積している。出土遺物には東海色の強い弥生式土器終末の變等の土器や砥石等が出土している。



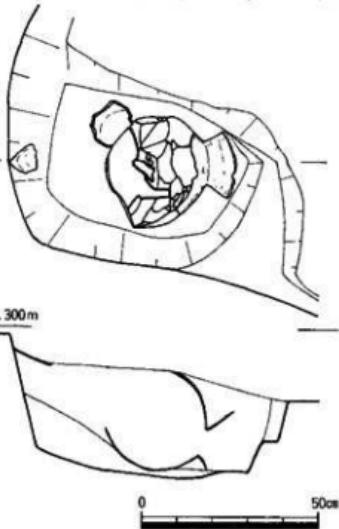
S H-3 : この番号は調査の都合上欠番となっている。

S H-4 : 調査区の北隅に住居跡の南西隅の一角が検出できた。壁は深さ30cmを計る壁溝、柱は確認されていない。覆土は六層に分類でき最下層六層淡緑灰砂の上に二層褐色粘砂七と五層暗茶灰色砂がのり、その二層の上に一層暗茶褐色粘土がのり五層の上に四層淡茶灰色砂土が、四層の上に二層暗茶灰砂土がほぼ均等に堆積している。

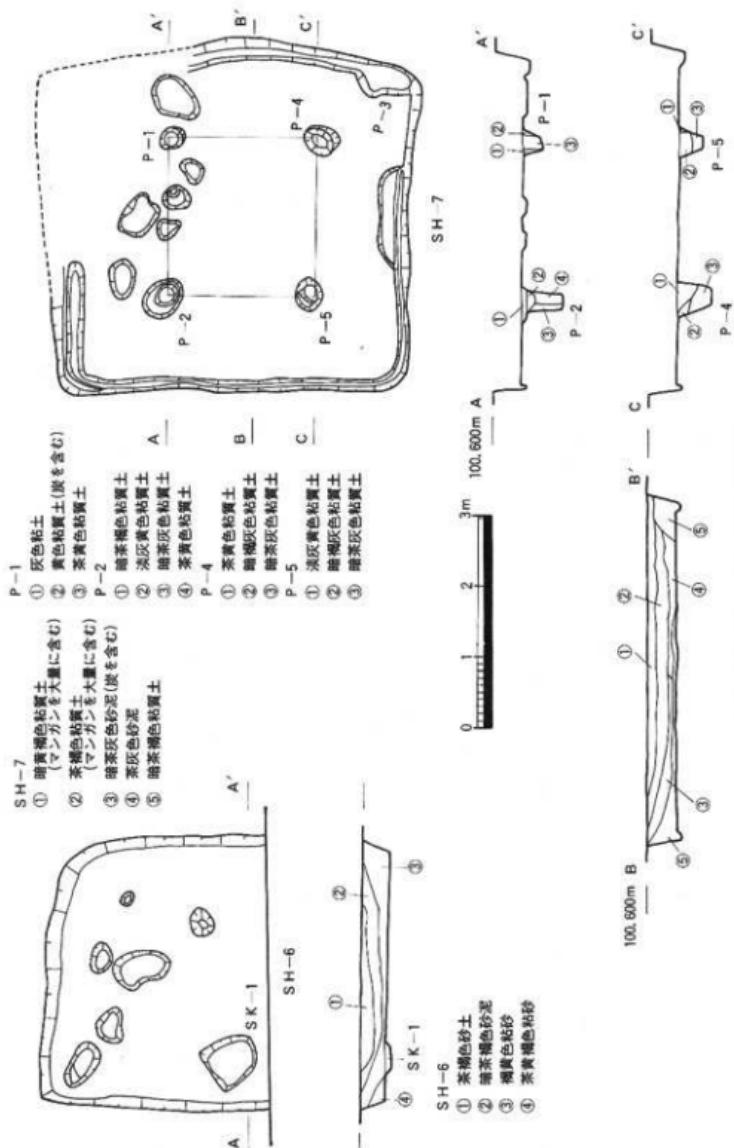
S H-5 : S H-4 の外側に広がるものである。肩口より約30cmの深さで一段段を有し、そのまま北の端で深さ約68cmの円形の落ち込みを形成している。形状はやや不整形になっているところもあるが一辺約7.2m の方形のものとおもわれる。覆土は二層からなっており上層は暗茶褐色砂土で下層は暗茶灰褐色粘土である。

S H-6 : 調査区の東端に調査区とほぼ方向を同じくするもので、形状は一辺3.6m の方形を呈するものである。深さは肩口より床面まで約38cm計る。壁溝は確認されていない柱は床面に七つのピット状造構があるが明確に柱間も構成するものは認められない。覆土は一層茶褐色砂土、二層暗茶褐色砂土、三層黄色粘砂、四層茶黃褐色粘砂がレンズ状に堆積している。

S H-7 : S H-6 の西に位置する竪穴住居跡で一辺5m の方形を呈する。深さは肩口より床面まで40cmを計る。壁溝は南辺の中央に存在する土壌から始まり南東隅の貯藏穴までめぐっている。柱は四本柱（P-1、P-2、P-4、P-5）で柱間は2m を計る。覆土は五層からなり最下層より肩口から五層暗茶褐色粘質土が入りこみ、その上に四層茶灰色砂泥、三層暗茶灰色砂泥（炭を多量に含む）がのり、次いで二層茶褐色粘質土（マンガンを多量に含む）が、その上に全体に一層暗黄褐色粘質土（マンガンを多量に含む）がその上に全体に一層暗黄褐色粘質土（マンガンを多量に含む）がまんべんなく均等にのっている。出土遺物にはP-1より壺が二点、P-1-3の貯藏穴からは壺が横だおして出土している。



第8図 S H-7. (P-3) 遺物出土状況図



第9図 SH-6, SH-7平面・断面図

## 2. 遺物

本調査において出土した遺物はコンテナに合わせて約30箱を数える。内容に於いては土器・鉄器・石製品・ガラス製品等があげられる。以下に於いてそのうちでも図化できたものを中心に遺構のところで説明を加えなかった堅穴住居跡の遺物について説明をここで加えて行く。

### S K-12

#### 〈土器〉 (図版一)

##### 壺A (1)

広義の意味での「重口縁を持つ壺で、口縁部は直線的に外方に開き粘土帯を垂下させたもので、3方向に粘土紐の貼り付け突帯を3本付ける。全体的に厚みがある。体部は球形もしくは卵形をなすとおもわれるが、下半部は欠損している。調整は斜め方向の荒いハケ目である。内面は摩滅していて不明である。所謂東海系のバレススタイルの壺であるが胎土は野洲川流域のものである。

##### 壺C<sub>1</sub> (2)

頸部が肩よりやや開きぎみに長く立ち上がり、そこより口縁部が外方に直線的に伸び口縁短部に面を持つもので、体部は肩より以下が欠損しているが球形か卵形のものであるとおもわれる。調整は細かいハケ目である。

##### I<sub>1</sub> (3)

所謂受口状口縁をもつもので頸部より外開きに立ち上がりやや内湾ぎみに真っすぐに立ち上がる。しかし、端部はつまみださないものである。

##### 壺I<sub>3</sub> (4)

受口状口縁の壺で口縁部は頸部より外開きしそこより外反するように立ち上がる。端部はやや下方につまみだし面を持つ。体部の調整は縱方向のハケ目である。

##### 鉢D<sub>1</sub> (6)

底部よりやや内湾するように体部が立ち上がり、そこより外反する口径10cmの口縁を持つ小型の鉢である。底部は継ぎが有り、小さな平底か脚台が付くものとおもわれる。

##### 鉢E (7)

底部は丸底で楕円形に体部が立ち上がり口縁部が真っすぐに立ち上がり端部は尖頭におさめる。調整は指圧による整形で口縁部を一度だけ横ナデする。

##### 器台B<sub>1</sub> (8・9)

受部は欠損しているが受部と脚部が貫通しない小型の器台で脚部は屈曲して広がるもので端部に面を持つものである。又、(8) は四方に円形の透かし穴がある。

#### S H - 1

〈土器〉 (図版二)

##### 壺C<sub>1</sub> (10)

頸部がやや厚く直に立ち上がりそこより外方に直線的に口縁が伸びやや肥厚しながら端部に面を持つものである。4層より出土している。

##### 壺B<sub>2</sub> (11)

大きく外湾しながら広がる口縁部から両方に拡張しつまみだされた帶状の端部を有する物で、その部分に五条の櫛描き山型紋を描く。又、頸部に削り出された小さな突帯がまわり頸部から肩にかけて短い単位の櫛描き直線紋をその下に五条の櫛描き山型紋を配する。5層より出土している。

##### 壺E<sub>1</sub> (12)

やや短めの外側に直線的に伸びる口縁部を持ち端部は四角く面を持つように若干つまみだす。頸部には貝殻や棒状工具または指圧によって斜めに凹をつけられた貼り付け突帯がめぐる。5層より出土している。

##### 壺I<sub>2</sub> (13)

頸部より外開きになった口縁部はそのままそこから真っすぐに立ち上がり端部を丸くおさめるものである。3層より出土している。

##### 壺I<sub>4</sub> (14)

頸部よりやや外開きに立ち上がらせて、そこより強い横ナデを加え端部を外方につまみだしたものである。3層より出土している。

##### 壺I<sub>5</sub> (15)

頸部よりほぼ横に開きそこより真っすぐに立ち上がった口縁部は横ナデとともに大きくなつまみだされる。端部は平坦である。頸部には櫛描き沈線が3条めぐる。4層より出土している。

##### 鉢C<sub>2</sub> (16)

口縁部が二段に屈曲する鉢である。口縁部は横ナデにより軽い段を形成しており、屈曲する鉢から二段に屈曲する鉢の出現する様子がよく理解できるものとおもわれる。P-1より出土している。

### 器台A<sub>1</sub> (17・18)

皿型の受部を持ち、受部と脚部が貫通するものである。脚部は緩やかにひろがり、三方に向て円形の透かし穴がある。何れも5層の出土である。

### その他 (19・20・21)

壺もしくは甕の底部であるが、全て凹み底である。

### 〈鉄器〉 (挿図第6図)

#### 鉄鎌 (1)

長さ2.3cm (内1.3cm茎部) 刃部幅約1cm、厚さ2mmの右茎の鉄鎌である。先端はやや丸みを帯び、反っている。

#### 用途不明鉄製品 (2)

大きく鉄鎌を帯びているが元は十字形を呈しているもので、十字部分でやや盛り上がりしている。

### 〈ガラス製品〉

#### ガラス玉

床面近くで縁青色のガラス玉が出土しているが、破損が激しく復元する事が不可能で同化することはできなかった。

### 〈石製品〉 (挿図第6図)

#### 管玉 (3)

長さ2.4cm、径5mm、孔の径2.5mm~1.5mm計るものである。

#### 用途不明石製品 (4)

槍状の石製品で尖った先のやや下方を段状にくびれをいれ、体部をややなかぶとりに縱方向に面取りをかさねたものである。逆の部分は欠如していて不明である。

#### 砥石 (2・3・6・8・10)

2は竹型をしたもの的一部分であるが、四面を使用している。材質は泥灰岩かとおもわれる。4層から出土している。

3は長方形のものとおもわれ、長辺と二面は使用されているが短辺は一辺は欠損し一辺は切断されている。材質は粘土質石灰岩かとおもわれる。側溝から出土している。

6は台形を呈したもの的一部分とおもわれる。使用面は一面である。二層より出土している。

8は蒲鉾型をしたもの的一部分とおもわれる。三面の使用面が認められる。材質は花崗

質砂岩とおもわれる。P-3より出土している。

すり石 (5・7)

5は方形の一辺を有する平らな石でやや中央が窪んでいるものである。材質は砂岩である。3層より出土している。

7は円形のものの一部分である。中央が大きく窪んでいる。材質は砂岩である。5層より出土している。

不明品 (1・9)

1は渋曲したハンドル状を呈したもので材質は花崗岩である。4層より出土している。

9は長方体をしたもので上と下を欠損しているが左右は切断面である。5層より出土している。

S H-2

〈土器〉 (図版二)

壺E (23・24)

23はやや短めの外開きに外反する口縁部を持つもので端部は丸くおさめる。頸部には極小さな山形の貼り付け突帯がめぐっている。3層より出土している。24は短めの外反する口縁部をもつもので口縁端部は面を持つものである。4層より出土している。

壺 (25)

口縁部は頸部より外反し、そこより直立して軽い横ナデにより内渋して端部に面を持つものである。体部は多くの破片より作図復元であるが、やや脛膨れのものとおもわれる。底部は小さな平底である。体部には多くの施紋がみられる。頸部には櫛描きの斜格子があり、その下に縦方向に刻目を持った断面台形型の貼り付け突帯がまわり、次いで肩部に右上から左下へ7本斜線を引いた外向鋸歯紋が17(推定)巡る。さらにその下には5条の櫛描き直線紋がまわり、次に4条の櫛描き波状紋がまわり、これをもう一度くりかえして体部中央で縦方向に刻目を持った貼り付け突帯が巡る。最初の突帯から次の突帯までの間にはさらに鋸歯紋と鋸歯紋との間を幾つかの(6・5・1・不・1)数毎に区切るように横方向に刻目を持った貼り付け突帯を有する。二本目の突帯の下には稲妻型に羽状紋を描きもう一度突帯を巡らせ羽状紋を描く。以下底部までは庵ミガキによって調整されている。口縁部の形態、頸部の施紋、胎土は近江特有のものであるが他の施紋等においては畿内、中国、東海等の影響を強く受けたものであるといえる。

S H - 4

〈土器〉 (図版三)

壺E (1・2)

やや短めの口縁部が直線的に外方に伸びるものである。2層より出土している。

壺I<sub>1</sub> (3・6)

3は頸部より外開きしそこより開きぎみに真っすぐにたちあがるものである。2層より出土している。6の体部には細い範描きの斜格子、2条の直線、左下がりの斜線をほどこす。

壺I<sub>4</sub> (4・5)

4・5は頸部よりやや外開きに立ち上がった口縁がさらに強い横ナデにより外開きにつまみだし端部に面をもたせたものである。4は2層、5は3層より出土している。

〈石製品〉 (図版三・六)

すり石 (4・1)

4は苗鉢型を呈するもので中央が楕円形状に亘る。材質は石英質の安山岩かとおもわれる。2層より出土している。1は円形状のもの的一部分で皿部が平らにすられている。材質は砂岩とおもわれる。3層より出土している。

S H - 5

〈土器〉 (図版三)

壺D<sub>1</sub> (7)

口縁部がほぼ直立する直口壺である。

壺I<sub>1</sub> (8)

頸部より外開きに立ち上がった口縁部がそのままたちあがったもので、やや首ながの頸部には粗な線描きの斜格子がみられる。1層より出土している。

壺I<sub>6</sub> (9・10・11)

頸部より真横に開き、そこより真っすぐに立ち上がった口縁部は斜め上方につまみだす端部はやや内傾する。特に9は口縁部に4条の横描き直線紋が、頸部には2条の弧状紋がめぐる。体部は斜めのハケ目で、内面は施ズリ調整である。何れも1層より出土している。

壺I<sub>6</sub> (12)

受口状口縁部の口縁部の作りが全体的に小柄で端部を丸い線状につまみだすものである。1層より出土している。

### ミニチュア土器（13）

口縁端部を欠損しているが、くの字に開く口縁部をもつもので底は平底である。

### S H-6 (図版三)

#### 壺 I<sub>7</sub> (17~19)

頸部から斜め上方に開き上がった口縁部は更に斜め上方に立ち上がり、横ナデを施されて真横に口縁部を大きくつまみだす。端部は平坦な面を形成する。14~17は2層より、18・19は1層より出土している。

#### 壺 I<sub>8</sub> (20)

頸部から斜め開き上がった口縁部は更にそこより立ち上がるものであるが端部はつまみださずやや内傾するように面を持つ。2層より出土している。

#### 〈石製品〉 (図版六)

#### 用途不明石製品 (2・3)

2は扁平片刃形の形状をなすもので両端を尖らせぎみにし両側を切断している。材質は粘板岩である。3層より出土している。3は60cm以上の大きな石で上面は平坦になっており、そのほとんどが火を受けたのか着色されているのか赤く変色している。又、一部分にくさび状の切れこみがはいっている。材質は花崗岩砂岩かとおもわれる。1層より出土している。

### S H-7

#### 〈土器〉 (図版四)

#### 壺 C (1・2・3)

1は外方に直線的に伸びる口縁部を持ち端部は尖っているもので、蝶形の体部を持つものである。貯藏穴とおもわれるP-3で横倒しの状態で出土している。

2は外方に直線的に伸びる口縁部を持つもので端部は丸くおさめる。口縁部と頸部は2度の横ナデによって整形されている。又、頸部には刻目のある小さな山形の突帯がめぐるP-1より出土している。

3は外方に直線的に伸びる口縁部を持つもので、端部上面は平坦になる。口縁部は2度の横ナデによって整形されている。体部の調整は頸部の下より細かいハケ日を幾度も重ねて行い体部まで続ける。そして肩部ではその上からめぐるように横ハケをおこなっているP-1より出土している。なを胎土にガラス質の粒子や金雲母が含まれており、河内産の土器の可能性がある。

	甕	壺	鉢	器台
SH-2				
SH-1				
SK-12				
SH-5				
SH-4				
SH-6				

第10図 土器編年試案

## IV. 年代

今回の調査では出土した遺物より大別してⅣ期に分類する事ができた。以下にその各期の時期と遺構について若干の説明を加えておく。

### I期： SH-2

今回の調査区で一番古い竪穴住居跡とおもわれるものでSH-1により切られていることから、其れより古い時代におくことができる。年代はこの辺りの近江における土器編年が確立されておらず言明できないがとりあえずここでは弥生時代末の5様式來から庄内のあたりにおいておきたい。

### II期： SH-1・SK-12

SH-1やSK-12がこれに属する。時期を決める資料となる土器はその共伴かんけいから大阪市高速電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書八尾南遺跡にみられるIV-a期の組成に酷似しているものとおもわれ、それを前後するものとしてとりあえずここでは庄内2式（櫛向3式）においておく。

### III期： SH-4・SH-6・SH-7

これらの時期の遺構は建物の方向や土器よりII期よりも新しい年代、併用式の段階に入るものとおもわれる。

### IV期： SD-5・6・SD-7・10・11

これらの溝は伴出している須恵器より須恵器のTK-209、TK-217、に類似するものとおもわれ6世紀末～7世紀末の年代がこれにあたえられる。なおここではこの溝に伴う集落跡は検出されていない。

### V期： SB-1・2

これらの掘堅柱建物は出土している遺物、手の字口縁の土師器小皿や黒色土師器の形態より11世紀末の年代がこれに与えられる。

### VI期： SD-8・9

これらの溝は江戸時代中頃に水田に使用する為掘りこまれた用水のようなものの跡とおもわれる。

以上、遺構の時期区分について述べてきた。これらの時期は恐らく高野遺跡をしめす年代の一部分であるとおもわれ時期的ギャップは今後の調査が埋めていくものと思われる。

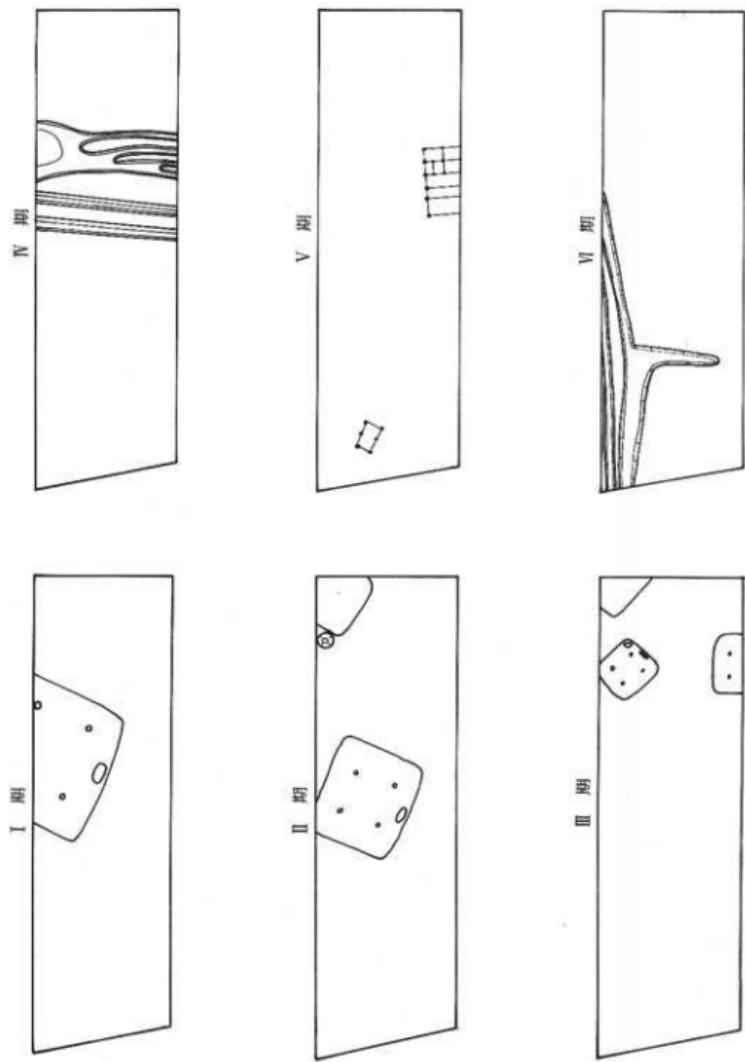
## V. 結 語

最後にここで今回の調査の結果をまとめて結びとしたい。高野遺跡の範囲は広大で今回の調査を行なった地点より式内社である高野神社まで広がっているといわれているが、その性格はほとんどにおいてわかっていない解明を得たれていたところであった。今回の調査は県道の道路敷に当たり制約の多い調査になったが、最大限の成果があがっている。その内容は遺跡は大きく分けて初期の時代から成り立っていることが理解できた。時代は弥生時代末より古墳時代初頭、少し遅をおいて古墳時代末、平安時代末、そして江戸時代までみられた。この状態は栗東町によって以前調査された今回の調査区の両側にあたる隣接する地域でも同じ様にみられ、このあたり一帯に同じような在り方の遺跡が広がっているものとおもわれる。しかしながら、遠く離れた高野神社の周辺の調査では、ここではみられなかった時代の古墳時代中期から奈良時代にかけての集落もみつかっており、このことから高野遺跡のなかでも弥生時代より中世までの集落が連続と続いている事が予想され、それらの集落の時期ごとの区分と範囲を遺跡のなかで明確に捉えていくことが今後の大きな課題となるものとおもわれる。

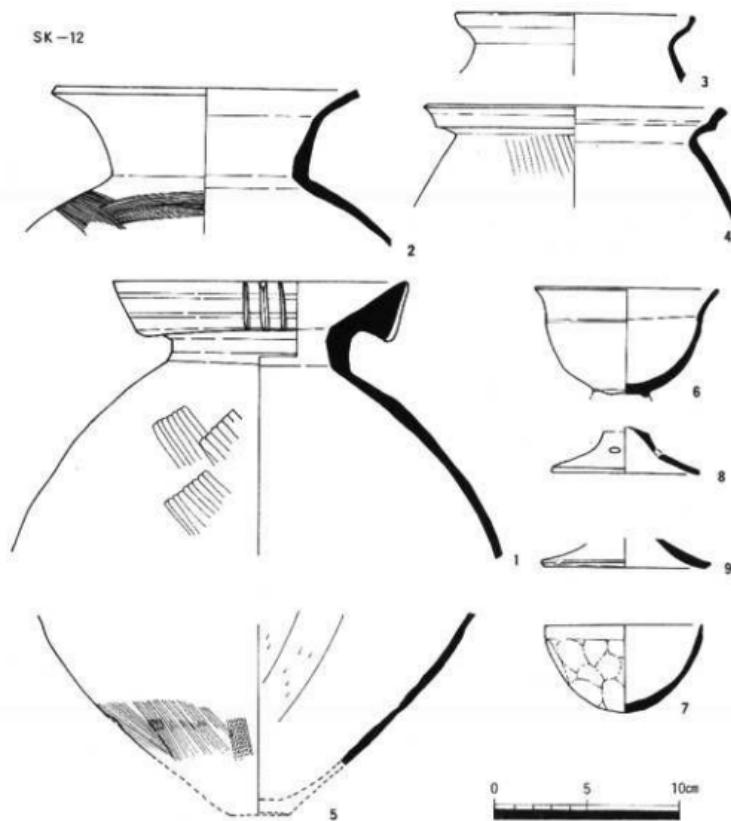
高野遺跡は高野氏、高野造の本貫地といわれているが、このあたり周辺でも10m級の大きな堅穴住居跡が沢山検出されており、本調査でも管玉やガラス玉、鉄製品が出土しており栗東町周辺で造営された古墳の数や規模からも当時のこのあたりの豪族の勢力のほどが想ばれる。また出土した土器のなかに、明らかに胎土は野洲川系のものとおもわれるが紋様様式が東海地方とのつながりを示すものがあり弥生時代末から古墳時代初頭にかけての地域間交流の一端が覗ける。

終わるにあたり以上のような結果が今後の調査の進展の一助になることを願つてもすびとしたい。

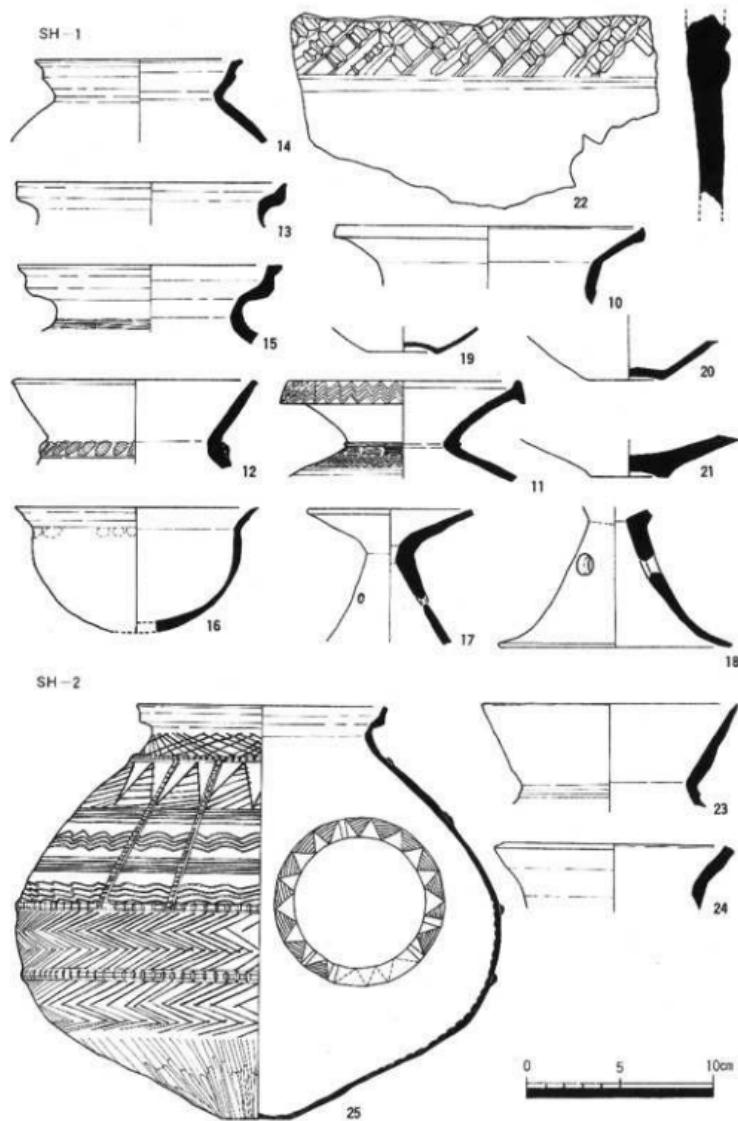
第11图 造模示意图



SK-12

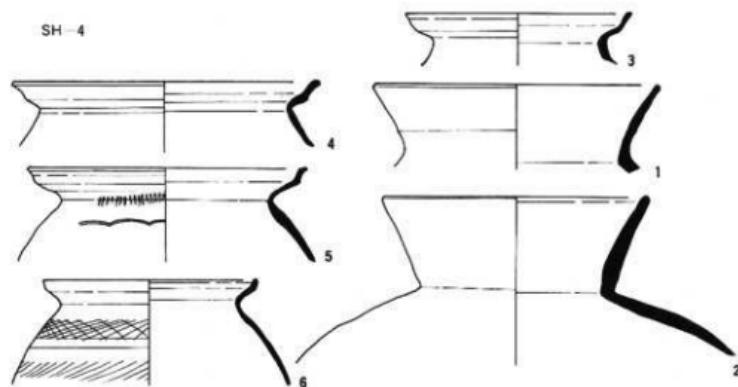


遺物実測図 1

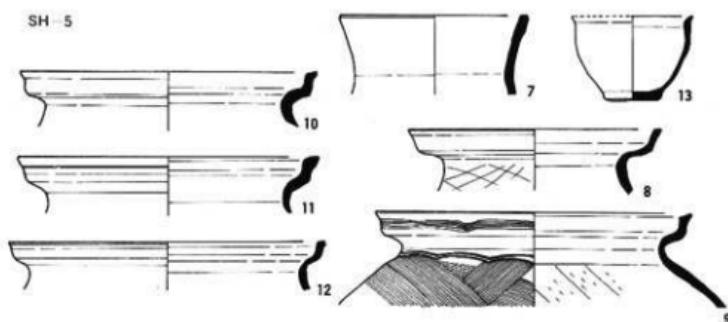


遺物実測図 2

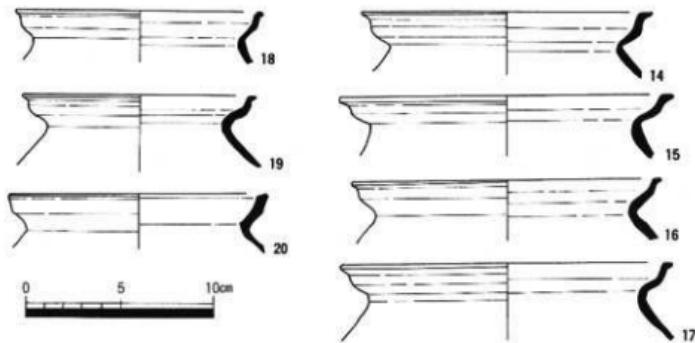
SH-4



SH-5



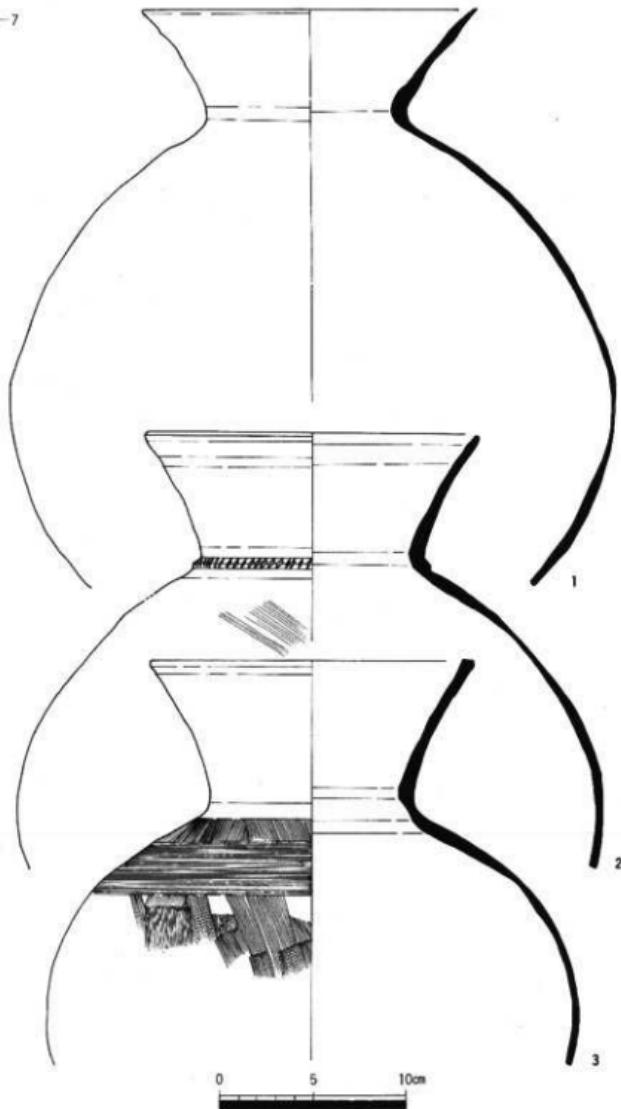
SH-6



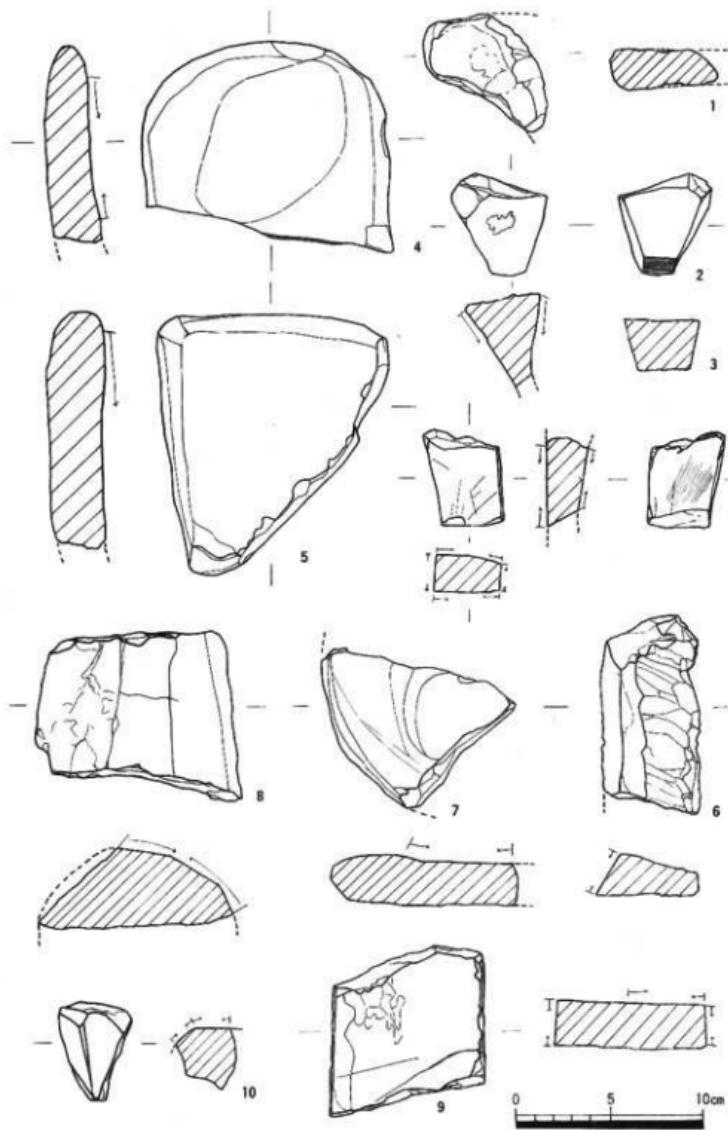
遺物実測図 3

SH-7

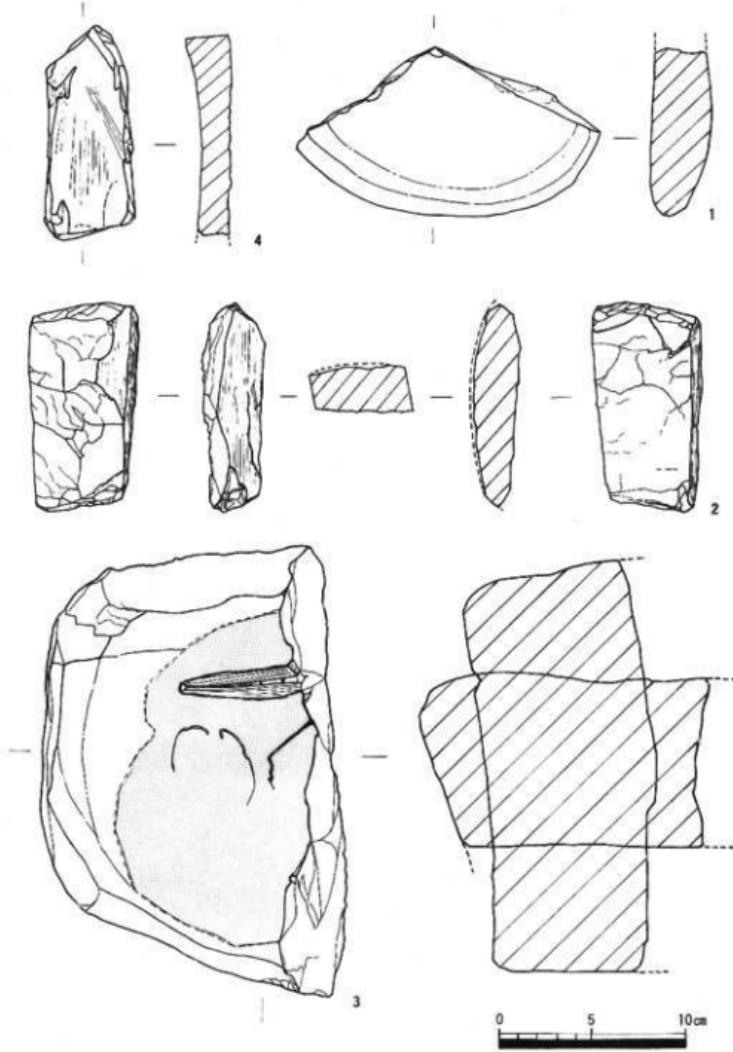
図版四



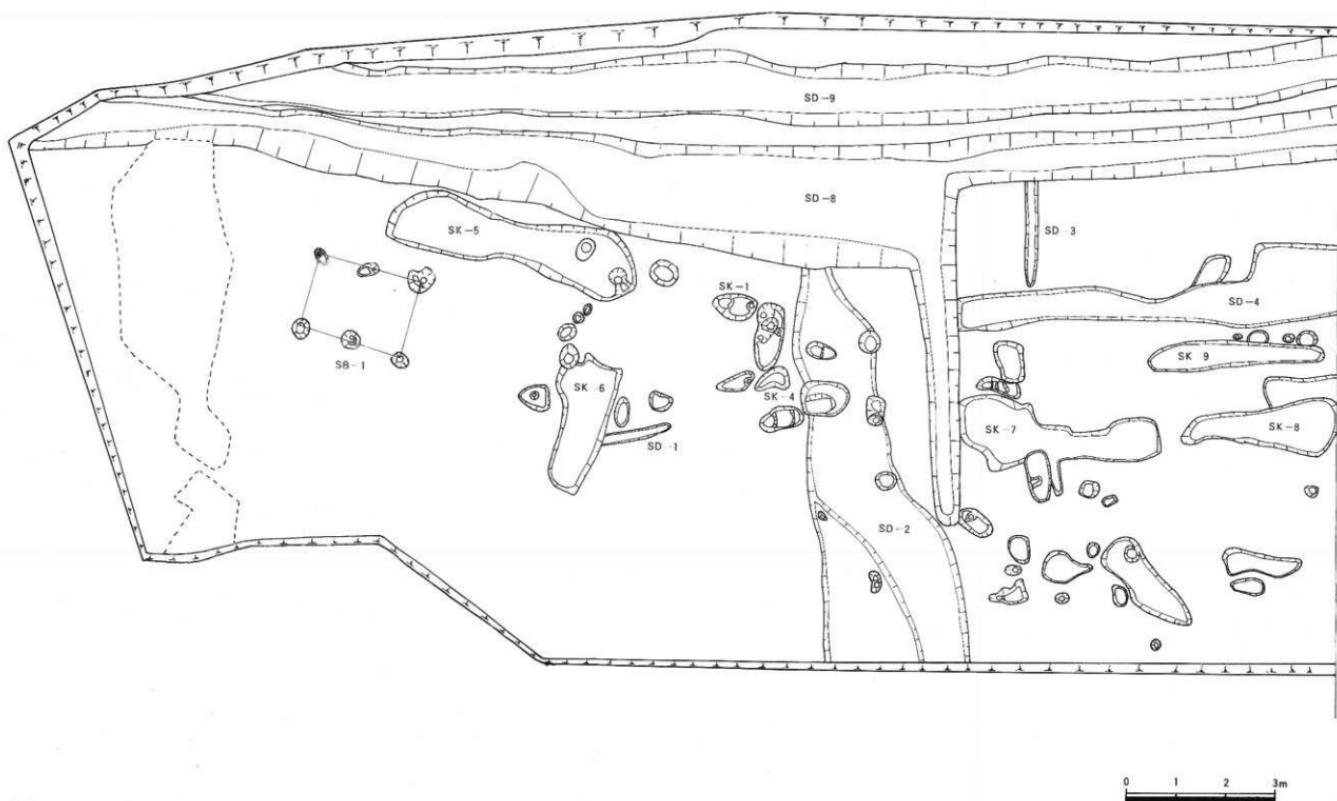
遺物実測図4



遺物実測図 5



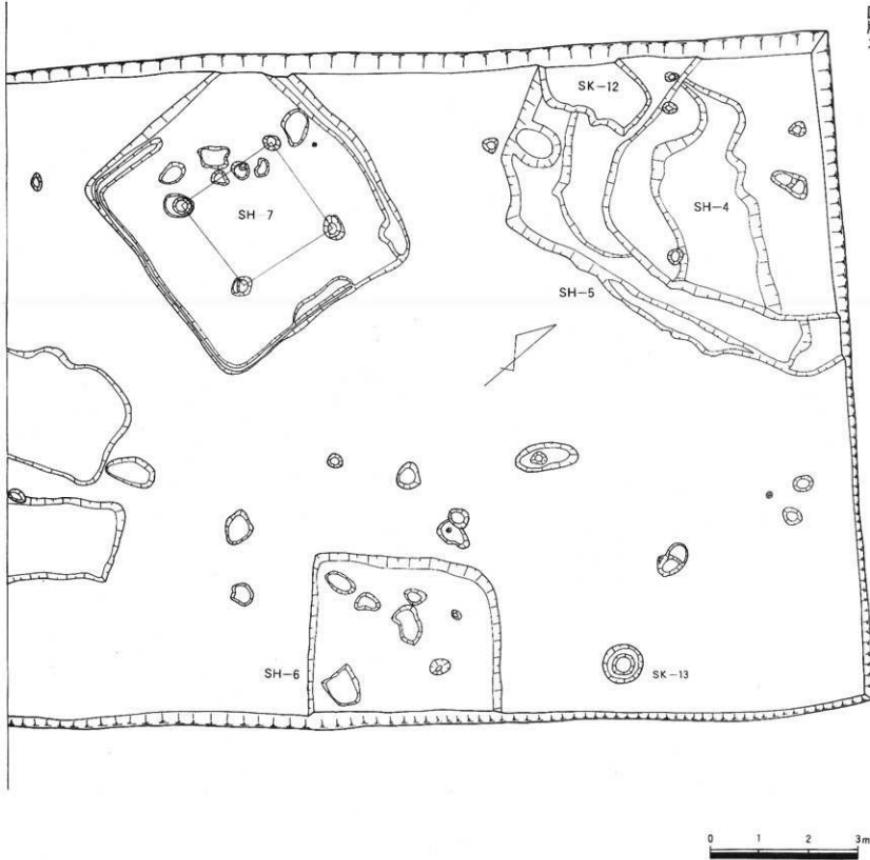
遺物実測図 6



调查区平面图1



調査区平面図 2



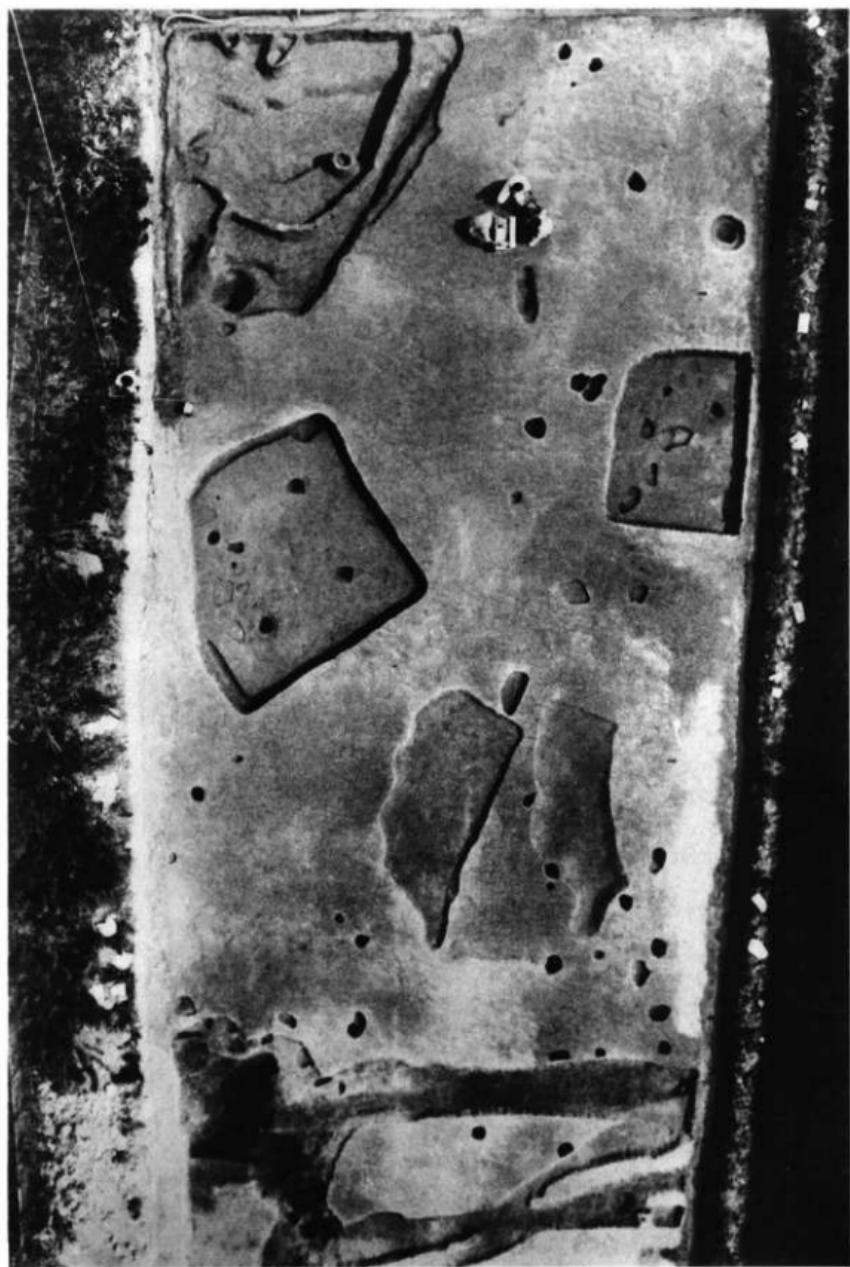
調査区平面図3



南トレンチ全景（北より）



南トレンチ全景（南より）



北トレンチ全景



SB-1 (西より)



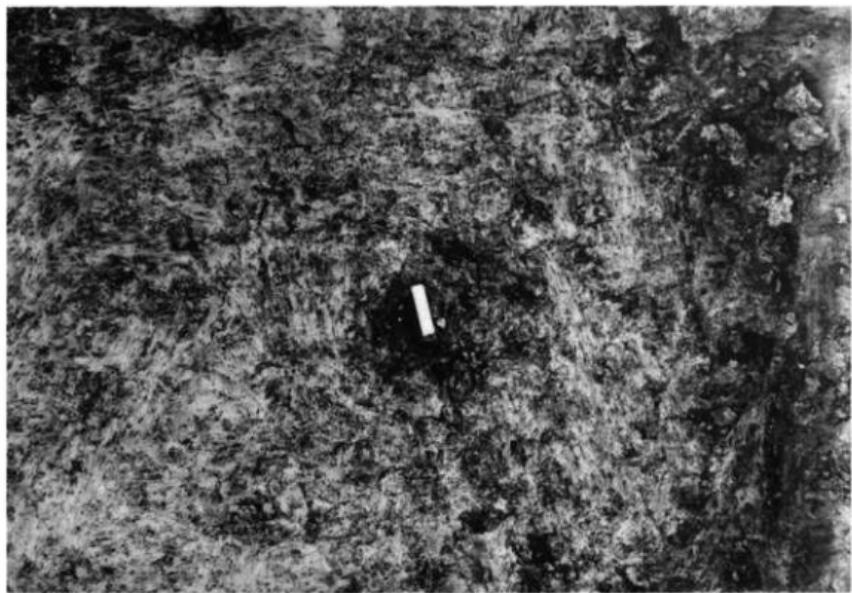
SB-2 (南より)



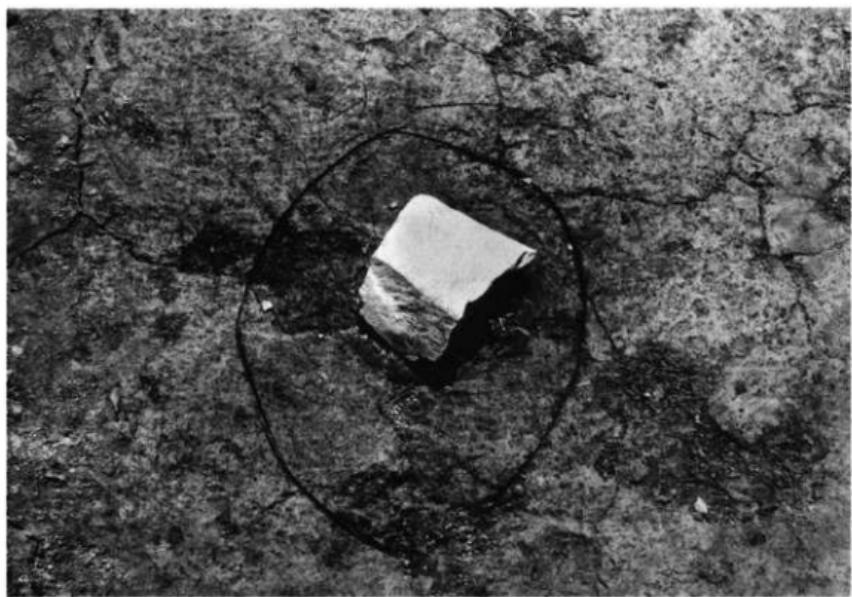
SH-1, SH-2 (南東より)



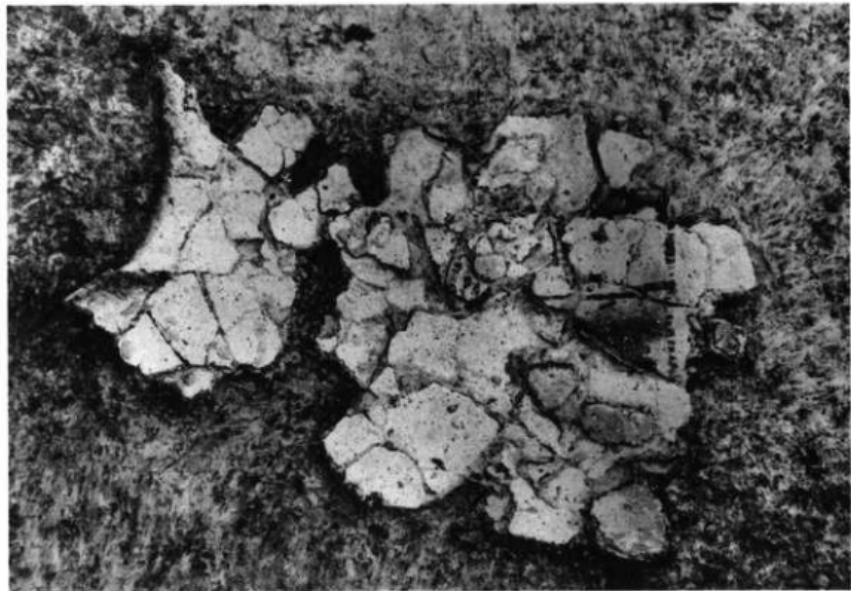
SH-1, SH-2 (南より)



SH-1 玉出土状況



SH-1, P-7 砥石出土状況



SH-2 土器出土狀況



SK-12 土器群出土狀況



SH-7 (南西より)



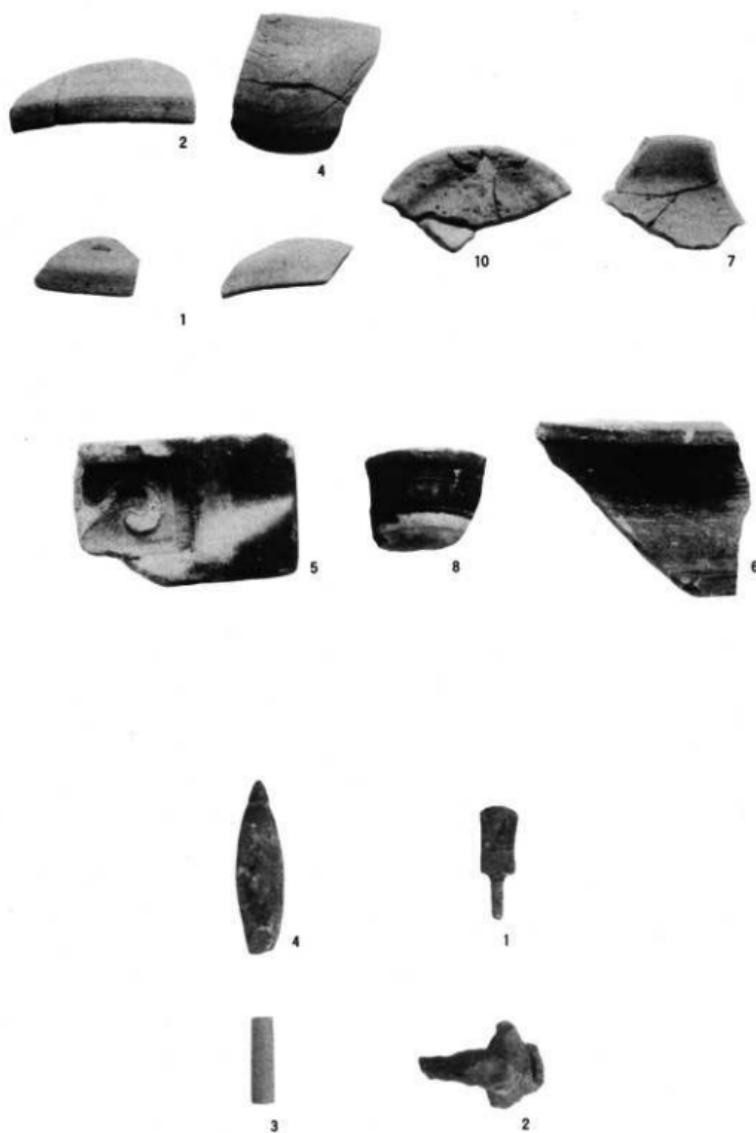
SH-6 (南東より)

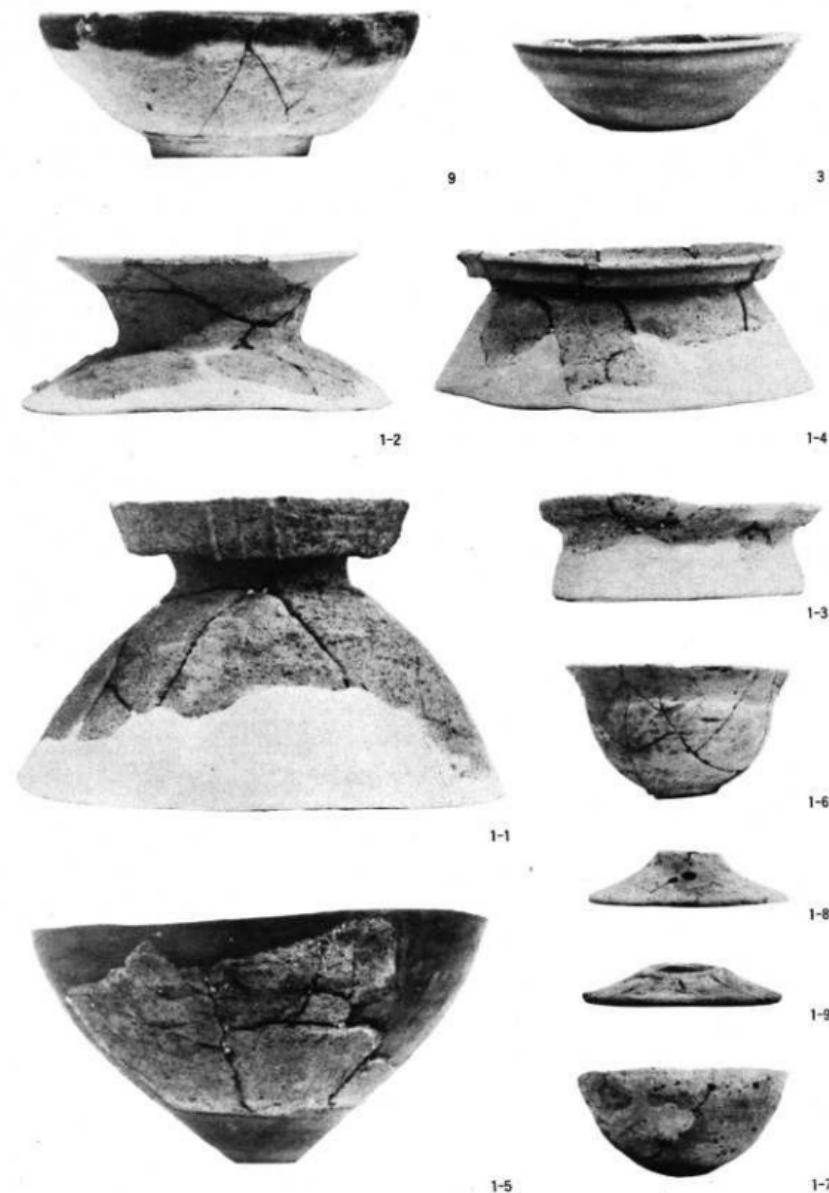


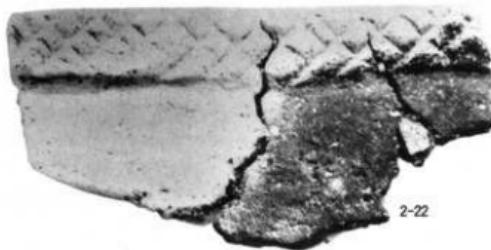
SH-7, P-3 土器出土状況（南西より）



SH-7, P-3 土器出土状況（北より）







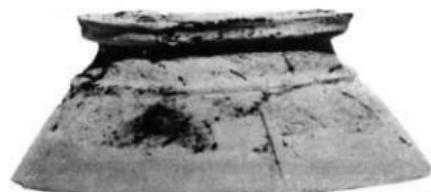
2-20



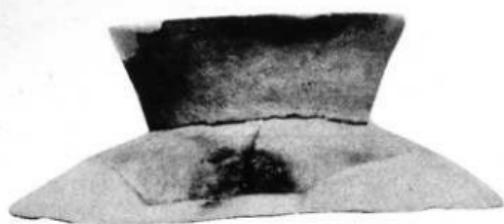
2-21



2-17



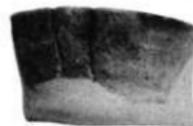
2-23



3-2



3-1



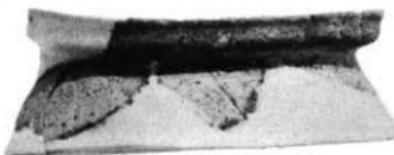
3-7



3-4



3-8



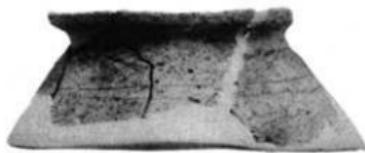
3-9



3-5



3-10



3-6



3-13



4-1



3-14



3-15



3-16



3-3



3-17



3-18



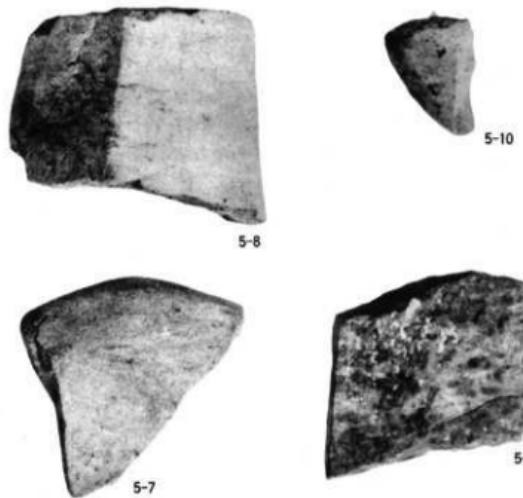
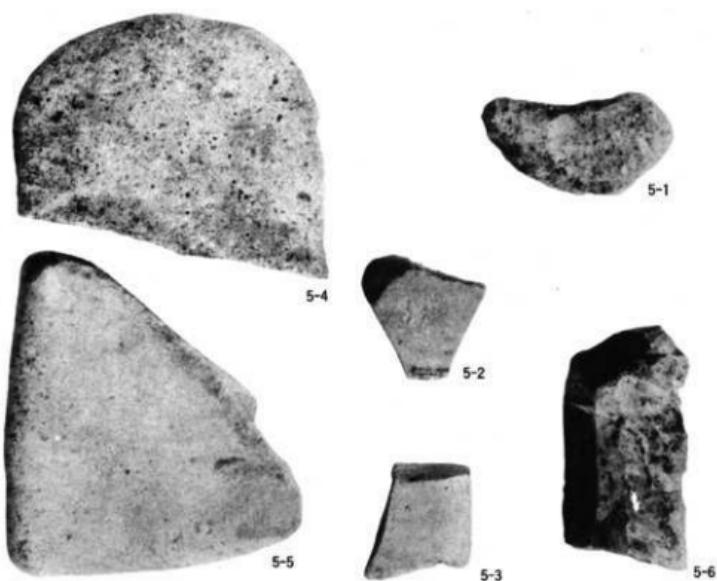
3-2

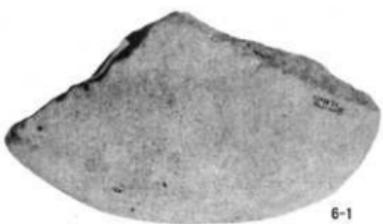


3-19



3-20





6-1



6-4



6-2



6-3

昭和61年3月

県道高野・守山線特殊改良工事に伴う  
高野遺跡発掘調査報告書

編集 滋賀県教育委員会  
発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075) 351-6034